



「新日本様式」とは？

みのしま たけし
袁島 毅

「新日本様式」協議会事務局次長

1954年富山県高岡市福岡町生まれ。'73年、富山県立高岡高校卒業。'77年、慶応義塾大学法学部卒業後(株)博報堂に入社、東京本社勤務。'99年より九州支社勤務。'03年より北陸博報堂富山支社長として勤務。'06年5月より「新日本様式」協議会に出向。事務局次長として現在に至る。

世界の人々が日本人の感性と技術力に共感することを目指して。

「新日本様式」誕生の背景

「新日本様式」協議会は、平成18年1月に発足しました。この背景には、アジア諸国の競争力が高まっているということがあります。その追い上げのなかで、「日本ブランド」を見直し、改めて確立していく必要がでてきています。また、価格から質の時代、そして品位の時代へ移っており、日本人の感性や固有の資産を打ち出していく必要があるということです。

基本としてのGENJUNKY

「新日本様式」とは、「わが国の伝統的な文化を、現代生活にふさわしいように再提言すること」です。これが日本人だということを出して、世界の人々が日本人の感性と技術に共感するものをつくる。これが、再提言の目指すことです。

そこで、日本人の自然観をベースとして、3つの和のころを「新日本様式」の基本としています。

引き継がれた知恵や技を大切にしつつ、常に新しい技術や文化を創り出す「たくみのころ」、個性を磨き、気品と気概のある生き方を求める「ふるまいのころ」、新しいものを尊重しながら自己を確立し、多様性と調和を重んじる「もてなしのころ」。「わかりにくいところもありですが、これを原点に議論が出發しています。

文化と時代、特別と普遍

この「新日本様式」の定義から、どんな方向を目指していったらいいか。今まさに吟味しています。

まず、伝統文化と時代という点で、ひとつの時代に焦点を絞らないこととする。それから、日本的という特別性と、日本的という普遍性の組み合わせ、両方持った日本らしさを考えていかなければならないということです。

ブランド評価としての100選の選出

「新日本様式」では、3年間の行動計画があります。ひとつは、ネットワークづくりキャンペーン。ホームページの作成や人材発掘などですね。それから、ブランド評価キャンペーン。ここに、本年度取り組んでいる「100選」の選出があります。その前段階の評価システム作り、それと「新日本様式」を象徴するロゴマークをつくること。3つ目は、より具体的な製品づくりキャンペーンで、これはまだ難しいと思いますが、会員企業が「新日本様式」の製品をつくるという動きです。

それぞれのフィールドでもものづくりを

外部の有識者10名からなる「評議会」を設置して、100選の選定やJマークの制定でも議論していただいています。100選については、今回約240点の応募がありました。審査は完了して、10月30日に公開されます。「たくみ」「ふるまい」「もてなし」の3つのころと、先端技術の融合、現代生活とのフィットなどから評価されています。

これから、それぞれのフィールドで「新日本様式」の視点でものづくりの動きが生まれれば、協議会としては大変うれしいと思っています。